

PREFACE.



Shakspeare Tells us that

*The man that hath no music in himself,
Nor is not mov'd with concord of sweet sounds,
Is fit for treasons, stratagems, and spoils.*

*Indeed the Western world may be said to have
ever confessed the spell of music, from the days when
the notes of Orpheus' golden lyre drew after them not
only the birds and beasts, but the very trees and rocks,
down to our own time when almost royal honours
are paid to the genius of a Wagner. It has even
been averred that music is an universal language,
inasmuch as it speaks straight to the heart of all
men at all times and in all countries. Nevertheless,*

明治廿一年戊子一月下幹

薩摩 重野安繹書



it must be admitted that the universal language of music has branched off into many separate dialects. Japanese music is not the least attractive of these. It is therefore a fit matter for congratulation that the history of Japanese music should have fallen into hands so skilful as those of the celebrated scholar to whom we owe the present work,—a work which is indeed a mine of information, not concerning music only but likewise concerning the kindred arts of dancing and the drama. Mr. Hanabusa has rightly judged that the history of these kindred arts cannot be separated from that of the music with which they have ever been inextricably bound up. The result of his labours is a work which will be the despair of future investigators, leaving to them, as it would seem to do, nothing further to discover.

H. H. Chamberlain.

31st December 1887

歌舞音樂略史序 譯文

シエークスビヤ云へるとあり、人トシテ音樂ノ心ナク、又優美ノ調
 曲ノ爲メニ感動セラレザル者ハ、其性必ズ信義ニ背キ、詐計ヲ逞ク
 スルニ適ス」と、實に西洋に於て音樂の徳力を稱ふるは、彼のオーフ
 ヒヤス(古代希臘ノ伶人)が琴瑟を奏すれば、心なき禽獸木石迄も來
 聽せりと云ひ傳ふる古代より、一匹夫のワグナー(今世獨逸ノ伶人)
 にして、殆んど帝王に等しき聲譽を博したる今世に至る迄、終始一
 轍なりと謂ふべし、然れば音樂の物たる、時の古今を論ぜず、地の東
 西を問はず、直に萬人の心耳に感通する者なるにより、是世界の普
 通語なりと、斷言する者あるに至れり、而かも此普通語の音樂、又多
 様異種の國風土音に、變轉支分したるは疑なし、就中日本の音樂の
 如き、亦人心を悅服すると、敢て少小に非ず、乃ち知る高名の學士小

中村翁、今其巧手を下して、日本音樂史を彙成せられたるは、大に祝賀すべきとなるを、其書、音樂は勿論、これに縁ある舞踏戲曲の藝術に至る迄、擧げて漏さず、洵に是れ吾人が右等の事に關して、知識を採掘すべき鑛坑とこそ謂ふべけれ、殊に翁が舞踏戲曲藝術は、古來音樂と密接貫聯せるを以て、兩者の歴史相分離すべからずと、判斷せられたるに至りては、最も其當を得たりと信ず、蓋し惟ふに、此著作は、誠に翁が多年努力の結果にして、充實到れり盡せり、後の研究者、或は其發明の餘地なきを見て、失望落膽する者あらん、

一千八百八十七年十二月三十一日

王堂チャムパレン

歌舞音樂略史上卷

目次

第一	上古より歌舞音樂の事業有りし事……………	一
第二	外邦より歌舞音樂を傳へし事……………	七
第三	大寶以來内外の樂を朝廷に用ゐられし事……………	九
第四	唐土高麗より傳來の樂并我國新製の樂の事……………	一九
第五	神樂催馬樂東遊風俗等の事……………	三三
第六	朗詠今様雜藝の事……………	四〇
第七	瞽者の平家を語る事……………	四七
第八	散樂又猿樂の事……………	五〇

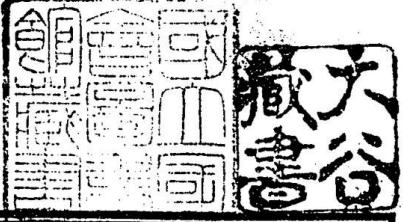
歌舞音樂略史上卷

文學博士 小中村清矩述

本朝にて歌舞音樂の事どもを記せる書古來尠しとせず然れども唐樂蜀曲田樂猿樂よりして近世の三絃筑紫箏歌舞伎淨瑠璃小謠等に至るまで大かた其道々の人の殊更に記し置て後進の便とせし物のみにしていまだ各藝の起原と沿革とを并せて考て其概略をさへ擧たる書の絶て有らざるは世の關典ならずや予素より舞樂の道に識らず又古今の書に考渉るべき才なしと雖も頃日いさゝか思ひ寄る事あるにより短見を願ず此略史を草せり後年博雅の君子ありて大成の舞樂史を著さん時或は考據の資ともならば最歡ばしかるべし

第一 上古より歌舞音樂の事業有し事

太古に天照大神故ありて天石窟に籠らせ賜ひしかば八百萬神愁



古代の小歌、後世の俚歌、等を集録せしもの、既に大田原、伴信友、黒川春村、などの好古の輩を始として、諸家の雜著に擧げたるが多
く、又友人那珂通高の考ありて、洋々社談十八號に載せ、そのれが道考
書七十三同栗田寛の、俚歌童謠の變遷と題せし詳説を、學藝志林第九
卷に收められたれば、其歌謠の體を詳にせんと思ふ者は、其等の書に
就きてみるべし。

第十六 歌舞音樂沿革忽論

上世より以來、歌舞音樂の業のさまざまに移り變れる大かたを考
ふるに、最も古への世より、既に和琴、和笛の樂器ありて、殊、舞、田舞の
類、國、倭、人、の土風にあはせけん事は、史籍の上にて能く知られ、諸
人の心志をうたひ出せる長短の歌には、自らなる曲節ありて、歌垣
の風流態も行はれしさま、是はたいちじるし、三韓我國に伏從しよ

り、種々の伎手と共に、樂工をも貢せしかば、始めて外邦の樂をも習
ひ傳へけん、推古の御世に、聖德太子佛道を起させたまふ時にあた
り、百濟人の吳の伎樂を傳へしかば、専らこれをもて齋會の用に充
て給ひき、唐國との通交漸盛になりて、遣唐の御使をも次々に遣さ
れしかば、彼國當時の樂をも、此方に傳へたり、近江の朝より大寶年
中に至り、令條定まりて、内外の樂を雅樂寮の掌る事となりてより
は、我國の古風を大歌立歌と稱へて、嚴しき朝會に用ゐ、久米舞、吉志
舞、倭舞、東舞、等は、大嘗會、また大社の神事に行はせられ、唐土三韓の
樂は、佛會また内々の御宴に用ゐさせ給ひたりき、然るに聖武の御
世に、天竺の僧婆羅門わが國に渡來て、佛道を弘むるなべに、彼土の
樂をも傳へ、嵯峨仁明の御世には、殊に唐樂を好ませたまひて、彼曲
章に倣ひ、新なるを作らせたまひければ、八音の妙なる、舞曲の麗し
き、漸く御國人の心に染みて、此國ぶりの古風は終に廢れ、纔に大嘗

會の如き神事にのみ遣りて、延喜より已後に至りては、朝會にも唐樂の立樂のみ用ゐさせ給へり、さて我國ぶりの大歌廢れてより、里巷の謳歌なる催馬樂の、尊き際にも行はれ、御神樂の神態にも交へ用ゐさせ給ひしかば、時に行はるゝ唐樂の調を移して、終には朝家の御遊を始め貴顯の翫となりて、必唐樂に交へ行ひたりき、是も又古めかしくなりて、圓融花山の御世の頃より、詩句に節附して朗詠を謠ひ、後白河の御頃より、和讃より出でたり、と覺しき今様歌、最も盛に行はれたり、此頃に至りては、倭舞東舞の古風は神事にのみ行はれ、僧家に延年の舞あり、貴賤の間には田樂の風流、猿樂の滑稽、白拍子の女舞等行はれしが、後鳥羽の御世の頃より、田樂猿樂とも、其をもて家の業とする輩も出來にけり、北條の時、田樂最も盛にして、足利の始に至りて衰へず、終には能といひて、古事のさまをまねび舞ふ巧藝を起せり、次て觀世、今春の兩氏、また一種の能藝を練磨し、

其稱は猿樂の舊に據り、其滑稽の趣は、別に狂言として、其伎人を異にせり、其より後、此伎漸く行はれて、終に田樂を壓倒し、豊臣徳川の時には、殊に愛せられて、四座其藝を盡せり、當時舞樂は、雲上佛寺の高き上にのみ用ゐられて、物遠かりしかば、上の風下に行はれて、武家は更なり、下さまの間までも、此猿樂の能を正しき物として、一般に弄びたりき、さて後鳥羽の御頃にや、法師の琵琶にあはせて、平家の物語を語り出したるが、足利の時に一變して、やゝ俗に近き淨瑠璃となり、三粒渡來して後、慶長の頃より、それに合せて語る事となりてより、十二段其他さまざま、新なるものも出來、傀儡を遣ふに合せて、人の目を喜ばする操座の起りしかば、近松の如き高才の作者、竹本の如き名手の淨瑠璃かたりありて、大に從來の面目を改め、一中節宮古路節と變じてより、曲節艶靡を極めて、其原平家より出でたるものにあらざるが如し、又舞の方は、白拍子の女舞變じて、曲舞

となり、又變じてお國が歌舞伎となる、女歌舞伎禁ぜられ、狂言盡と名稱を改めしより、漸く唐山の傳奇に類し、其趣向年々に巧を競ひ、且操座の淨瑠璃を其まゝに演じて、人情世態を盡すに至りしかば、貴賤男女とも、俗間の聲樂の歡ウツクシは、此に上ウツクシこそす物なしと思へり、そもそも雅樂俗樂の沿革、かくさまざまなる中にあるは入り亂れて考へ難きこともあるを、幸に舞樂をはじめ、其道々の書の傳はりたる、近來好事の人の類纂したる物とによりて、予が短才なるも、少しく其端緒を窺ふ事を得て、かくは物しつ、されば要とある事どもの書き漏れたるが多かるべく、又思ひひがめたる事も少なからざるべきを、其は只假そめのほどの所業にて、深くも思ひ渉らざる事と、みん人ののどめたまへかし、

歌舞音楽略史下卷終

此書は、いにし明治十三年の七月、官より休暇を賜へる日より筆を起して、六十日ばかりを経て、稿本の成りぬるを、心しりの友、かれこれに閱をこひ意見をこひて、一わたり淨書せしまゝにて、八とせの星霜を過ぐせり、然るに、世の人の參考ともなるべき事のあれば、摺卷として發行せばいかにと、其友たちの勸めらるゝ事、まばゝなりけれど、年ごとに變り行く時の勢に従ひては、改削せんと思ふ條も多く、又増補せばやと思はるゝ所々もあれど、此近き年ごろは、公私の事繁くて、いさゝかの暇なく、老の積りては、盛夏の賜暇にも、浴泉の旅の衛生わざなどにて、果さず有りぬるをいかにせん、よしや體裁煩はしく、考案足らずとも、世に出して、哲人の批評をうけ、博識の補正もあらば、是にますよろこびあらじと思ひて、印刷に授くる事とはなりぬ、さし畫は蛇足に近きもあるべけれど、或は考古の資ともなりぬべきか、此著作を助けられたる友といふは、重野安繹、栗

田寛、小杉樞邨、柏木探古等の諸氏なり、明治二十年十一月のはじめ、小中村清矩更に書の後に志るす、

畫工 長命晏春
補畫 川邊御楯

明治二十九年五月十七日再版印刷
明治二十九年五月廿八日再版發行
明治三十六年六月五日訂正三版印刷
明治三十六年六月十日全發行

定價金壹圓

著者 故小中村清矩

發行者 三樹一平

印刷者 石川金太郎

印刷所 英舍



發行所

東京神田區錦町一丁目
特電話本局二四三八番

明治書院

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

株式會社 英舍